

ホーリネス系教会に関わる日本人成人における 「キリスト教における宗教性」発達モデルの検討

松島公望^{1)*} 宮下一博²⁾

¹⁾東京大学大学院・総合文化研究科 ²⁾千葉大学・教育学部

Investigation of the Developmental Model of Christian Religiosity for Japanese Adults of Holiness Church

MATSUSHIMA Kobo^{1)*} MIYASHITA Kazuhiro²⁾

¹⁾Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、ホーリネス系教会に関わる日本人成人における「キリスト教における宗教性 (Glock, 1962; Verbit, 1970 による)」発達モデルを検討した。ライフヒストリー法によって構成した「キリスト教における宗教性」発達モデル (松島, 2007; 松島・宮下, 2008) および宗教意識尺度・宗教知識テスト・宗教行動尺度 (松島, 2005, 2007) を用いて、ホーリネス系教会に関わる日本人成人 (122名) を対象に、「キリスト教における宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの関連・差異を検討した。その結果、宗教意識尺度、宗教知識テスト、宗教行動尺度の得点の高いクリスチャンほど「キリスト教における宗教性」発達モデルに適ったプロセスを経ることが示された。

The purpose of this study was to investigate the developmental model of “Christian religiosity (by Glock, 1962; Verbit, 1970)” for Japanese Christian adults of Holiness church. The relation and difference with each phase in the developmental model of Christian religiosity of Holiness church adults (N=122) were examined, using the developmental model of Christian religiosity (Matsushima, 2007; Matsushima & Miyashita, 2008), which was constructed by life history method, Religious Consciousness Scale, Religious Knowledge Test, and Religious Behavior Scale (Matsushima, 2005, 2007). The result suggested that Christian with significantly higher scores of Religious Consciousness Scale, Religious Knowledge Test, and Religious Behavior Scale tended to go through the process of the developmental model of Christian religiosity.

キーワード：「キリスト教における宗教性」発達モデル (the developmental model of Christian religiosity)

ホーリネス系教会 (Holiness church) 日本人成人 (Japanese adults) クリスチャン (Christian)

問題と目的

日本における宗教性発達研究では、宗教性発達過程を始めとして、その特徴はほとんど明らかにされていない (神保, 1980; 杉山, 2004; 西脇, 2005)。その理由として、日本人の宗教性発達に関する心理学的研究の難しさが挙げられる (神保, 1980)。日本の宗教的風土は複雑であり、信仰の表明の仕方も異なっているため、日本人一般の宗教を特定することは困難である。また、学校や家庭の調査協力を得ることが困難な場合も多く、信仰の対象を特定できない場合もある。

以上の問題点を考慮すると、日本において実証的に宗教性発達を検討するためには、できる限り教団、教派を特定する必要がある。特定の宗教を信じる信者を対象にすることにより、宗教性発達を詳細に検討することができる。まず1つの教団、教派の宗教性発達を明らかにすることができれば、この研究成果を起点にして、他の教団、教派と比較することも可能となり、日本人の宗教性

発達を検討するための礎を作ることができる。

そこで筆者は、質的調査法の一つであるライフヒストリー法を用いて、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「キリスト教における宗教性」(以下、「宗教性」と記す)発達モデルを構成した (松島, 2007, 松島・宮下, 2008; Figure 1参照)。ホーリネス系教会を対象とする理由として、ホーリネス系教会は、他の教派に比べて個人の情緒的かつ自覚的な回心体験を重視する土壌があり、その信者は個人の信仰を自覚的に意識する傾向が強く、「宗教性」を顕在的に捉えやすいこと、また筆者は、ホーリネス系教会に属するクリスチャン家庭に育ち、ホーリネス系教会に関わった経験があることから、ホーリネス系教会に関わるクリスチャンの生育歴や宗教体験、考え方などを理解しやすいと考えたからである。

「宗教性」発達モデルを構成するにあたり、「宗教性」を次のように定義した (松島, 2006, 2007)。「宗教性」とは、「個人がどの程度キリスト教的であるか」を測定する指標であり、個人がキリスト教についてどの程度、「信じるのか、感じるのか (宗教意識)」、「振る舞うの

*連絡先著者：松島公望

か（宗教行動）」を表す。宗教意識とは、信念や知識が関わる「認知的成分（信じる）」と情緒的な体験が関わる「感情的成分（感じる）」を含む概念であり、「行動的成分（振る舞う）」は宗教行動に相当する。宗教意識と宗教行動を包括する枠組が「宗教性」といえる（Cornwall, Albrecht, Cunningham, & Pitcher, 1986）。

「宗教性」の枠組にしたがい、Glock (1962) が提示した「信念、知識、体験、行動、効果」の5次元の指標を援用した。「信念」とは宗教的な教えを信じること、「知識」とは教義、教典に関する情報を有すること、「体験」とは回心体験などを含み、宗教的経験や宗教的感情を持つこと¹⁾、「行動」とは礼拝、祈りなどといった特定の宗教的行動である。また、「効果」とは以上の4つの次元が信者の生活や行動、精神などに及ぼす（クリスチャンになることによって受ける）社会的、世俗的な影響を意味する。「効果」はさらに「報酬」と「責任」に分けられる。「報酬」とは個人における心の平安、悩みからの解放、幸福感などを指し、「責任」とは倫理的禁止の受容や、宗教集団における責務を全うすることを指す。

今田 (1955) は、個人の宗教性発達において宗教集団を始めとする宗教的環境から大きな影響を受けると示唆している。日本のキリスト教においても、教会内でのクリスチャンとの関係が個人の「宗教性」に影響を与えることが想定されることから、Verbit (1970) が提唱した「共同体」の次元を援用することとした。「共同体」とは、信仰を介した対人的・情緒的な関わりを指し、集団への帰属感や社会化の促進に関連する。また、「共同体」は、宗教意識に位置づけられ、「体験」と同様に感情成分に含まれる。

以上、「宗教性」を整理すると「信念・知識」は認知的成分、「体験・共同体」は感情的成分であり、この4つの次元が「宗教意識」に分類される。「行動」は行動的成分であり、「宗教行動」に位置づけられる。「効果」は、すべての次元からの影響を示す内容であるから、「宗教意識」、「宗教行動」両方に含まれる。

松島 (2007)、松島・宮下 (2008) では、Glock (1962)、Verbit (1970) の宗教性の6次元および作道 (1983, 1984a, 1984b, 1986) の宗教的社会化²⁾を基に、7人の神学生 の口述資料、文献資料にしたがって検討し、ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデルを構成した。

「宗教性」発達モデルの構成においても、モデルの信頼性、妥当性について検討したが（松島, 2007; 松島・宮下, 2008）、これらの検討だけでは、モデルの妥当性について確かめられたとは言い難い。そこで、本研究では、ホーリネス系教会に関わる日本人成人（以下、成人と記す）の「宗教性」発達について、構成した「宗教性」発達モデル（松島, 2007; 松島・宮下, 2008）に沿って検討したいと考えている。すなわち、構成した「宗教性」発達モデルの発達プロセスが成人にとって妥当であるかを検討する。そのためモデルの検討では、各局面に対応した相応しいデータおよび「宗教性」に関する尺度（松島, 2005, 2007）を用いることによって、各局面ごとの関連・差異を検討することとする。

各局面ごとの分析にあたっては、以下のような分類を

行う。

まず、ホーリネス系教会では、本人の自覚に基づいた回心体験によるクリスチャンの信仰成長を重視していることから（小林, 2004）、回心体験の有無によって分類を行う。すなわち、回心体験の分類については、「回心

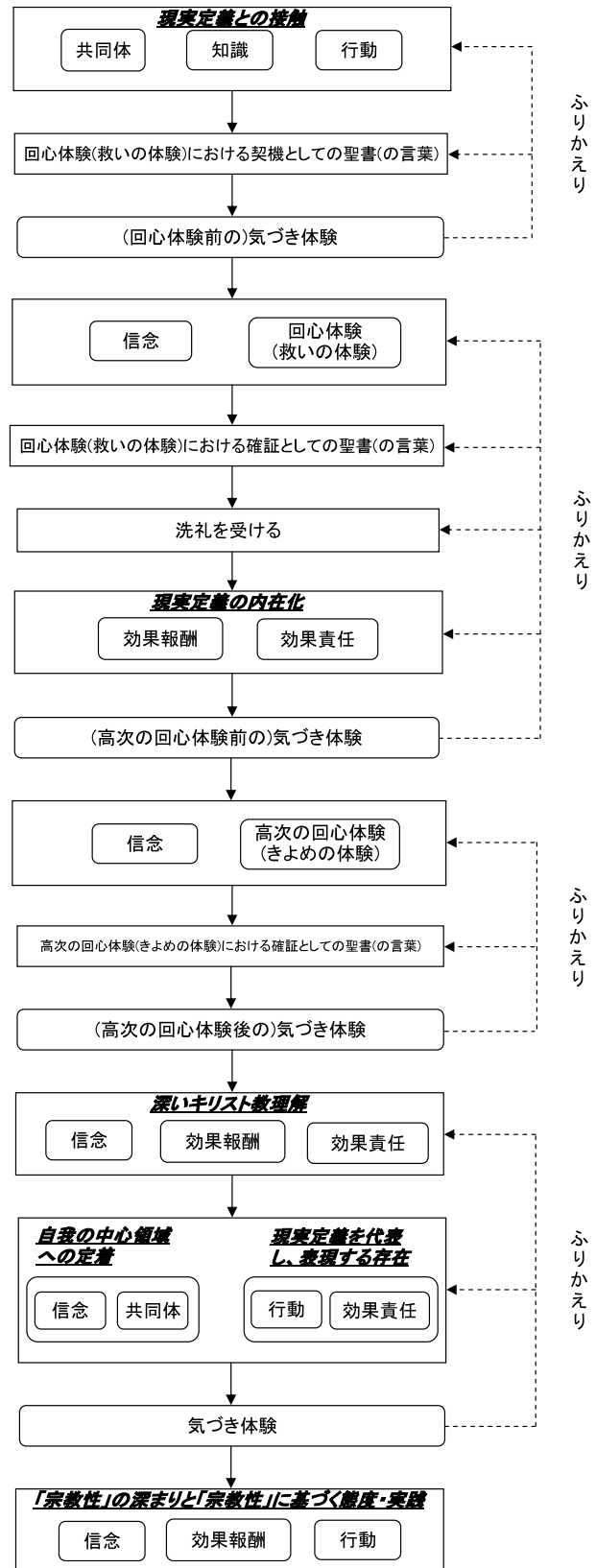


Figure 1 日本人クリスチャンにおける「宗教性」発達モデル

体験（救いの体験³⁾がある」, 「高次の回心体験（きよめの体験⁴⁾がある」の両方に回答した者を高次の回心体験群（以下, 高次体験群）とする。「回心体験（救いの体験）がある」のみ回答した者を回心体験群とする。「回心体験がない」と回答した者を非クリスチャン群とする。

分析に必要な場合を除いて, それぞれの回心体験以降については, その体験をしていない対象者は分析対象から外し, それぞれの回心体験以降のプロセスは, その体験をした対象者のみ分析対象とする。

また, 「回心体験（高次の回心体験）における契機としての聖書（の言葉）」, 「回心体験（高次の回心体験）における確証としての聖書（の言葉）」, 「洗礼を受ける」

については, 言葉（洗礼）あり群, 言葉（洗礼）なし群に分類し, 高次体験群および回心体験群と組み合わせて分析を行う。

さらに, 回心体験や聖書の言葉等における「なし」群については, 「わからない」と回答した者も「なし」群とした。その理由として, ホーリネス系教会では回心体験では本人の自覚を重視していることから, 「わからない＝明確な自覚がない」と判断することができるので, 「わからない」と回答した者についても「なし」群として扱うこととする。

Table 1 宗教意識尺度 質問項目

信念
私は、いくら豊かな生活をしていても、神に従わない生活は、本当に幸福だとはいえないと思う。
神を信じれば、人間は苦しみや悲しみの中に希望を見出すことができると思う。
私は、信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方であると思う。
私は、どんなに科学が進んだとしても、人間は信仰がなければ幸せにはなれないと思う。
体験
私は、自分が、神の前にいるという感覚がある。
私は、聖霊が私の人生で積極的に働いているのを感じる。
私は、包み込むような温かさを、神に感じる。
私は、神の愛をひしひしと感じている。
私は、神がいつも自分と共にあり、神によって守られていると感じる。
私は、教会で礼拝したとき、神様が現にそこにいるのを感じる。
祈りの中で、または日常生活の重要な場面で、私は、神を近くに感じる。
私は、神との間の交わりを経験したことがある。
私が、今この職業(身分)についているのは、神の計画によっているのだと感じる。
共同体
私は、教会の活動を通じて、信者同士のつながりとその楽しさを感じることができる。
私は、クリスチャンの友人との交わりを通して、神のみ心を知ることがある。
私にとって、教会は親しみを覚える場所である。
私は、教会の壮年会、婦人会、青年会などに参加することによって、教会の仲間と親しい交わりをしている。
私は、クリスチャンの友人と交わったり、その生き方を知ることによって、自らの信仰を省みている。
私は、自分の教会の仲間を素晴らしい人だと思う。
効果報酬
キリスト教は、私の人生の全てに影響している。
私は、信仰によって、自分を見つめることができた。
私は、信仰によって、感謝する気持ちを学ぶことができた。
私は、信仰によって、悲しみがやわらげられ、救われた。
キリスト教は、私に、人生観、世界観、価値観の基準を与えてくれる。
効果責任
私たちは、教会に献金する義務がある。
私たちは、教会の中で奉仕する義務がある。
私たちは、家族や周囲の人々に伝道する義務がある。
私たちは、毎週、礼拝に出席する義務がある。
私たちは、毎週、祈禱会に出席する義務がある。

方 法

(1) 質問紙の構成

本研究の質問紙は、Glock (1962) と Verbit (1970) の「宗教性」に基づく宗教意識尺度⁵⁾・宗教知識テスト⁶⁾・宗教行動尺度によって構成されている。

本研究で使用した質問項目は、以下の通りである。

①宗教意識尺度 松島 (2005) の成人版宗教意識尺度を使用した。本尺度は、「信念」4項目、「体験」9項目、「共同体」6項目、「効果報酬」5項目、「効果責任」5項目の5つの下位尺度からなる。選択肢は、「まったくあてはまらない、あまりあてはまらない、少しあてはまる、中程度にあてはまる、かなりよくあてはまる、非常によくあてはまる」の6段階評定 (1～6点) である⁷⁾。

Table 2 宗教知識テスト 質問項目

①旧約聖書の預言者ではないのは以下の誰ですか。
 (1)エリヤ (2)エレミヤ (3)パウロ (4)エゼキエル (5)イザヤ

②どれが旧約聖書の預言書に含まれていないものですか。
 (1)ゼカリヤ書 (2)ナホム書 (3)パルク書 (4)ハバクク書 (5)オバデヤ書

③4つの福音書を以下に書いて下さい。
 () () () ()

④以下のカッコの中を埋めてください。
 4-1. 金持ちが神の国に入るよりも、() を通る方が簡単である。
 4-2. 心の清い人たちは、さいわいである。彼らは() であろう。

⑤以下の聖書の言葉の引用箇所を書いて下さい。
 『神のなさることは皆その時にかなって美しい』
 () () 章 () 節

⑥以下の引用された聖書の言葉を書いて下さい。
 6-1. ヘブル人への手紙11章1節
 ()
 6-2. コリント人への第二の手紙5章17節
 ()

Table 3 宗教行動尺度 質問項目

あなたは、この1年の間で、どれくらい未信者の人を教会に誘いましたか。

あなたは、この1年の間で、どれくらい教会の仕事(教会のそうじ、聖務当番、週報の印刷など)を手伝って奉仕しましたか。

あなたは、この1年の間で、どれくらい教会のチラシ配布をしましたか。

あなたは、過去1年の間で、どれくらい祈禱会に出席しましたか。

あなたは、この1年の間で、どれくらいキリスト教に関する書物(信仰書・霊想書)を読みましたか。

あなたは、この1ヶ月の間に、1日にどれくらい個人的に聖書を読みましたか。

あなたは、過去1年の間で、どれくらい礼拝に出席しましたか。

あなたは、この1年の間で、どれくらい家族や友人、知人にイエス・キリストや聖書の話をしましたか。

本尺度の信頼性と妥当性は松島（2005）により確認されている。本尺度の項目はTable 1に示す。また、本研究における内的整合性は、「信念」： $\alpha = .854$ 、「体験」： $\alpha = .919$ 、「共同体」： $\alpha = .870$ 、「効果報酬」： $\alpha = .855$ 、「効果責任」： $\alpha = .930$ であった。

②**宗教知識テスト** 松島（2007）の成人版宗教知識テストを使用した。本テストは、記述回答式および多肢選択法であり、8項目からなる。本テストの信頼性と妥当性は松島（2007）により確認されている。本尺度の項目はTable 2に示す。また、本研究における内的整合性は、 $\alpha = .677$ であった⁸⁾

③**宗教行動尺度** 松島（2007）の成人版宗教行動尺度を使用した。本尺度は、8項目からなる。選択肢は6段階評定（1～6点）であるが、各項目で選択肢の内容が異なる⁹⁾。本尺度の信頼性と妥当性は松島（2007）により確認されている。本尺度の項目はTable 3に示す。また、本研究における内的整合性は、 $\alpha = .761$ であった。

(2) 調査対象者

回収数は206名であった。そのうち有効回答数は122名（有効回答率59.2%；男性40名，女性82名；年齢範囲26～64歳（平均年齢46.2歳）；8教会）であった。

回心体験別の該当者数は、高次体験群が51名，回心体験群が59名，非キリスト教群が10名であった（該当者数の合計が有効回答数と異なるのは、欠損値のためである）。

(3) 調査時期

2001年10月～11月。

(4) 手続き

各教会に質問紙を郵送し、牧師の指示のもと個別に記入してもらい後日回収する方法と、筆者が直接教会の礼拝に赴き、教示を行い、一斉に調査を行い、その場で回収する方法とを用いた。全ての調査において、教示の際に、調査への回答を拒否する権利があることを伝えた上で調査を実施した。

結 果

成人における「宗教性」発達モデルの各局面ごとの検討を行った。結果をFigure 2およびFigure 3に示す（Figure 2およびFigure 3については有意な結果のみを示している）。以下、各局面ごとの分析結果を記述する。

(1) 現実定義との接触 [[「共同体」・「知識」・「行動」] → 回心体験における契機としての聖書（の言葉）[有無]

現実定義との接触 [[「共同体」・「知識」・「行動」] から回心体験における契機としての聖書（の言葉）の有無との関連を検討するために、「共同体」・「知識」・「行動」を説明変数、契機の聖書の有無を目的変数として、判別分析を行った。結果をTable 4およびTable 5に示す。その結果、第1判別関数（関数1）の正準相関係数は1%水準で有意であり、第2判別関数（関数2）の正準相関係数は5%水準で有意であったので、関数1および関数

2は意味のある関数として判断することができた。

関数1における標準化判別係数および各群の判別関数の平均値をみると、高次体験 [契機あり] 群において、「共同体」、「知識」、「行動」が、正の影響を与えていることが示された。続いて、関数2における標準化された正準判別関数係数および各群の判別関数の平均値をみると、高次体験 [契機なし] 群および回心体験 [契機なし] 群では、「行動」および「知識」が、正の影響を与えていることが示された。また、回心体験 [契機あり] 群では、「共同体」が、正の影響を与えていることが示された。

すなわち、「共同体」、「知識」、「行動」の全てが高い高次の回心体験をしたキリスト教ほど契機の聖書を有する傾向にある。また、「知識」、「行動」が高い高次の回心体験をしたキリスト教および回心体験のみのキリスト教では、契機の聖書を有さない傾向にあるといえる。さらに、「共同体」が高い回心体験のみのキリスト教では、契機の聖書を有する傾向にあることが示された。契機の聖書を有さないキリスト教にとっては、聖書やキリスト教の知識を学ぶことや宗教行動を取ることで回心体験に関係する聖書の言葉には結びつかないということである。直接関係すると考えられる「知識」や「行動」で結びつかないわけだから、回心体験に関連する聖書の言葉を有さないのは当然の結果かもしれない。

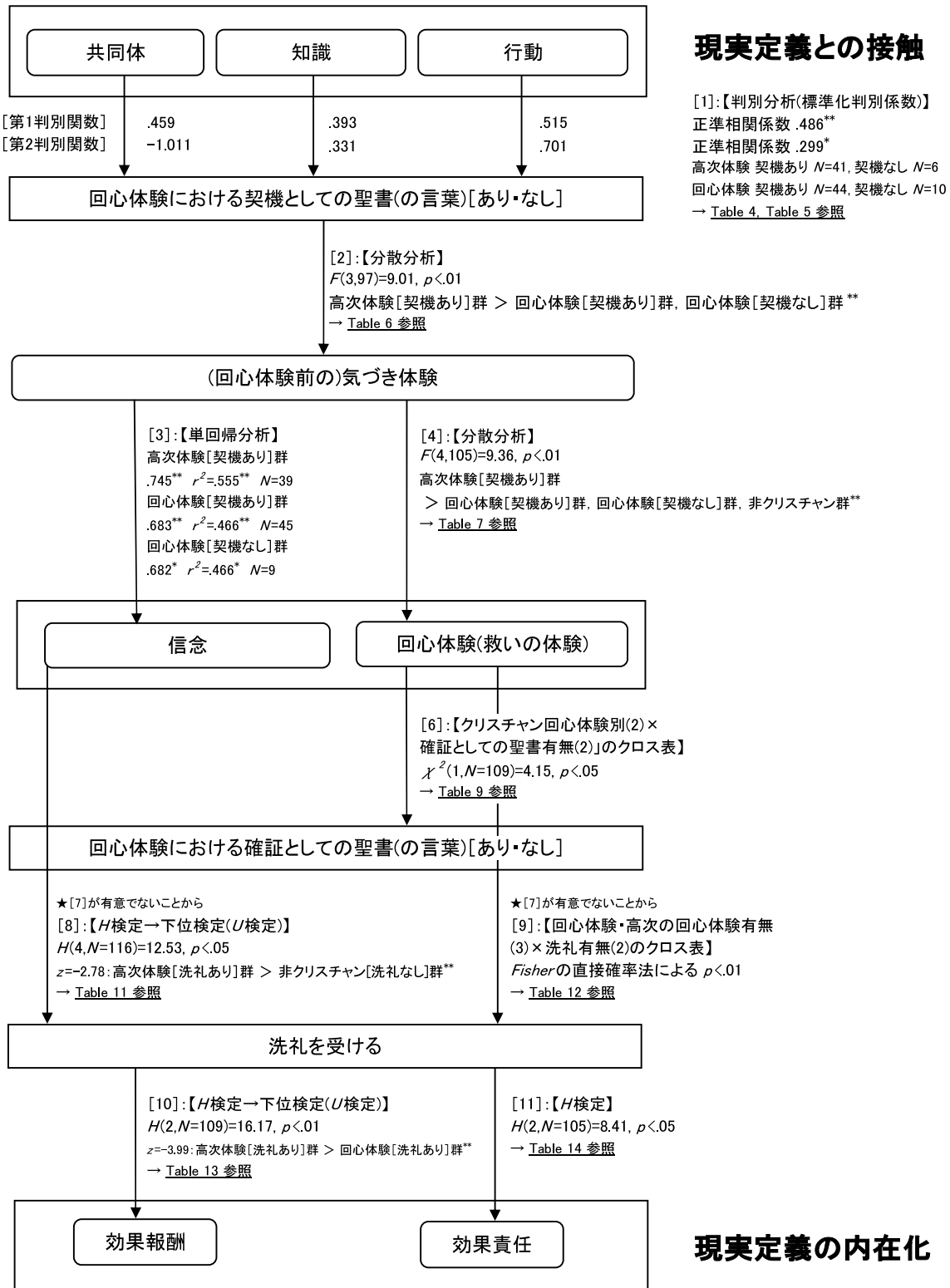
Table 5の判別結果より、元のグループ化されたケースのうち、60.40%が正しく判別された。群ごとにみても、高次体験 [契機あり] 群では73.17%、回心体験 [契機あり] 群では61.36%、回心体験 [契機なし] 群では40.00%が正しく判別されたが、高次体験 [契機なし] 群では正しく判別された者はなかった（0.00%）。

(2) 回心体験における契機としての聖書（の言葉）[有無] → 「気づき体験」

キリスト教群について、回心体験における契機としての聖書（の言葉）の有無と「気づき体験」との関連を検討するために、1要因分散分析を行った（Table 6参照）。その結果、4群間に有意差が認められた（ $F(3, 97) = 9.01, p < .01$ ）。Tukey法による多重比較を行った結果、高次体験 [契機あり] 群 > 回心体験 [契機あり] 群、回心体験 [契機なし] 群（ $p < .01$ ）であった。高次体験群間では、契機の聖書の有無には有意な差が認められなかったが、契機の聖書を有する高次体験群は、回心体験群よりも高い「気づき体験」を有することが示された。

(3) (回心体験前の)「気づき体験」 → 「信念」

キリスト教群（高次体験群，回心体験群）における契機の聖書のあり・なし群および非キリスト教群について、「気づき体験」と「信念」がどのように関連しているかを検討するために、「信念」を目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、高次体験 [契機あり] 群，回心体験 [契機あり] 群，回心体験 [契機なし] 群で有意な値を示し（高次体験 [契機あり] 群： $r^2 = .555 (p < .01)$ ， $b = .745 (p < .01)$ ， $N = 39$ ；回心体験 [契機あり] 群： $r^2 = .466 (p < .01)$ ， $b = .683 (p < .01)$ ， $N = 45$ ；回心体験 [契機なし] 群：



* $p<.05$ ** $p<.01$

Figure 2 「宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの分析結果(1)

$r^2=.466(p<.05)$, $b=.682(p<.05)$, $N=9$), 高次体験 [契機なし] 群, 非クリスチャン群では有意な値は示さなかった (高次体験 [契機なし] 群: $r^2=.313(n.s.)$, $N=5$; 非クリスチャン群: $r^2=.422(n.s.)$, $N=9$)。回帰係数の値をみると, 高次体験 [契機あり] 群, 回心体験 [契機あり] 群, 回心体験 [契機なし] 群で「気づ

き体験」が「信念」に正の影響を与えていることが示された。高次体験[契機なし]群では有意な値は示さなかったが, 対象人数 ($N=5$) が少ないことが影響していると考えられる。

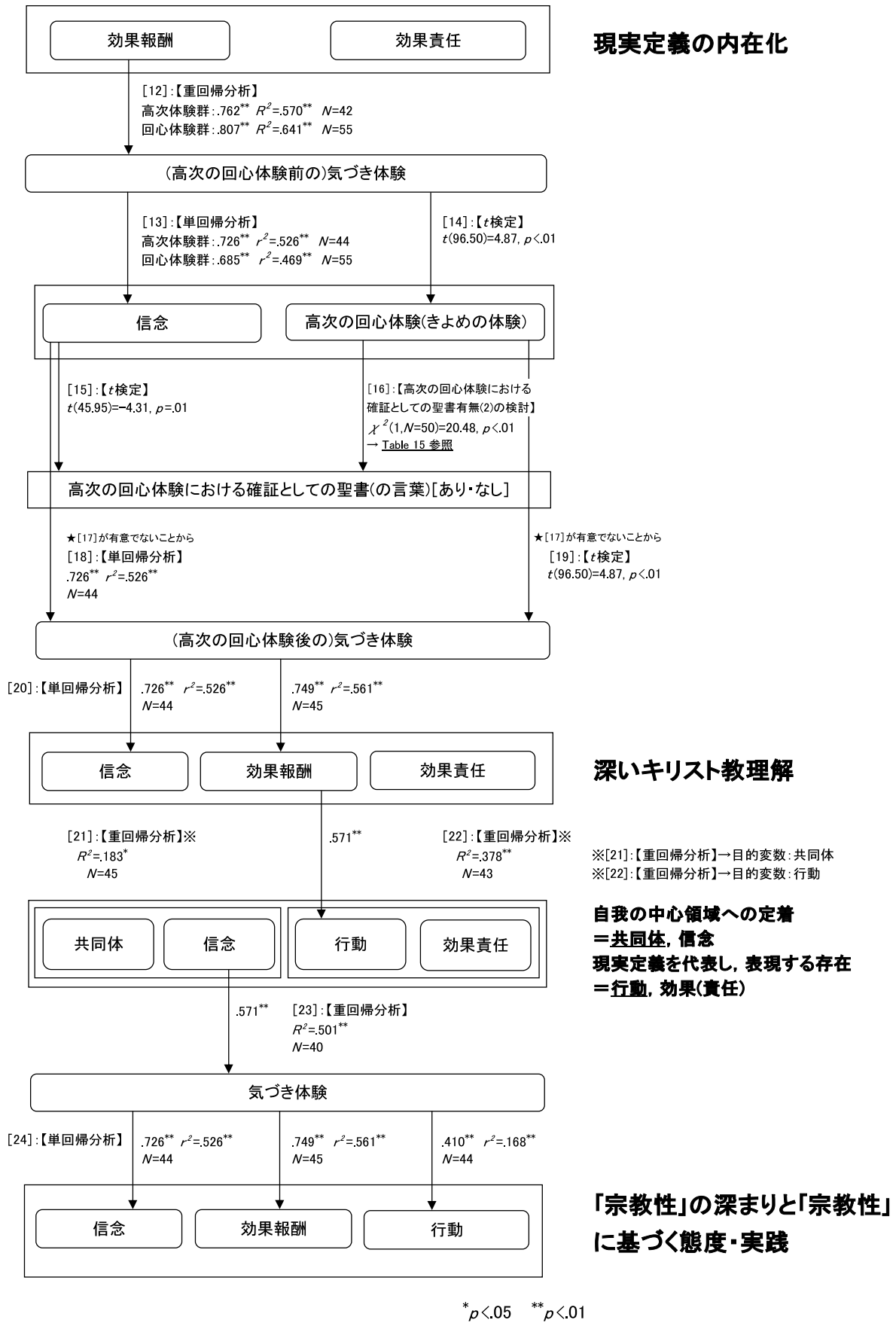


Figure 3 「宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの分析結果(2)

Table 4 判別分析結果

	第1判別関数	第2判別関数
正準相関	.486	.299
p値	.000	.049
説明率	74.95	23.82
標準化判別係数		
共同体	.459	-1.011
知識	.393	.331
行動	.515	.701
クリスチャン	各群の判別関数の平均値	
高次体験 [契機あり]群	.634	.084
高次体験 [契機なし]群	-.402	.537
回心体験 [契機あり]群	-.342	-.291
回心体験 [契機なし]群	-.855	.614

(4) (回心体験前の)「気づき体験」→回心体験(救いの体験)[有無]

クリスチャン群(高次体験群, 回心体験群)における契機の聖書のあり・なし群および非クリスチャン群について, 回心体験の有無と「気づき体験」との関連を検討するために, 1要因分散分析を行った(Table 7参照)。その結果, 5群間に有意差が認められた($F(4, 105) = 9.36, p < .01$)。Tukey法による多重比較を行った結果, 高次体験[契機あり]群 > 回心体験[契機あり]群, 回心体験[契機なし]群, 非クリスチャン群 ($p < .01$)であった。高次体験群間では, 契機の聖書の有無による有意な差が認められなかったが, 契機の聖書を有する高次体験群は, 回心体験群および非クリスチャン群よりも高い「気づき体験」を有することが示された。

(5) 「信念」→回心体験における確証としての聖書(の言葉)[有無]

クリスチャン群(高次体験群, 回心体験群)について, 回心体験における確証としての聖書(の言葉)の有無と「信念」との関連を検討するために, クラスカル・ウォ

Table 5 判別分析による判別結果

調査結果 [元のデータ]	判別結果[予測グループ]				合計
	高次体験 [契機あり]群	高次体験 [契機なし]群	回心体験 [契機あり]群	回心体験 [契機なし]群	
高次体験 [契機あり]群	30(73.17)	0(0.00)	10(24.39)	1(2.44)	41(100.00)
高次体験 [契機なし]群	2(33.33)	0(0.00)	4(66.67)	0(0.00)	6(100.00)
回心体験 [契機あり]群	16(36.36)	0(0.00)	27(61.36)	1(2.27)	44(100.00)
回心体験 [契機なし]群	0(0.00)	0(0.00)	6(60.00)	4(40.00)	10(100.00)
判別成功率 = 60.40%					人数(%)

Table 6 「体験」得点の平均値, 標準偏差, 人数, 分散分析結果

クリスチャン	高次体験 [契機あり]群	高次体験 [契機なし]群	回心体験 [契機あり]群	回心体験 [契機なし]群
平均値	46.59	43.40	39.83	35.22
標準偏差	5.64	6.50	8.49	8.76
人数	41	5	46	9
F値	$F(3,97) = 9.01^{**}$			
多重比較	高次体験[契機あり]群 > 回心体験[契機あり]群, 回心体験[契機なし]群 ^{**}			

** $p < .01$

Table 7 「体験」得点の平均値, 標準偏差, 人数, 分散分析結果

	クリスチャン				非クリスチャン群
	高次体験 [契機あり]群	高次体験 [契機なし]群	回心体験 [契機あり]群	回心体験 [契機なし]群	
平均値	46.59	43.40	39.83	35.22	33.00
標準偏差	5.64	6.50	8.49	8.76	10.63
人数	41	5	46	9	9
F値	$F(4,105) = 9.36^{**}$				
多重比較	高次体験[契機あり]群 > 回心体験[契機あり]群, 回心体験[契機なし]群, 非クリスチャン群 ^{**}				

** $p < .01$

Table 8 「信念」得点の平均値, 中央値, 標準偏差, 人数, ノンパラメトリック検定分析結果

クリスチャン	高次体験 [確認あり]群	高次体験 [確認なし]群	回心体験 [確認あり]群	回心体験 [確認なし]群
平均値	22.11	21.33	20.74	20.90
中央値	23.00	24.00	21.00	21.50
標準偏差	2.24	4.62	3.51	3.81
人数	46	3	47	10
平均ランク	59.47	62.83	47.87	49.70
H検定	H(3,N=106)=3.89			

Table 9 クリスチャン回心体験別(2)×回心体験における確認としての聖書(の言葉)の有無(2)のクロス表

クリスチャン回心体験別	回心体験における確認としての聖書 の有無[人数(%)]		合計
	あり	なし	
クリスチャン高次体験群	48(94.12)	3(5.88)	51(100.00)
調整済み残差	2.0	-2.0	
クリスチャン回心体験群	47(81.03)	11(18.97)	58(100.00)
調整済み残差	-2.0	2.0	
合計	95(87.16)	14(12.84)	109(100.00)

$\chi^2(1, N=109)=4.15, p<.05$

Table 10 回心体験における確認としての聖書(の言葉)の有無(4)×洗礼の有無(2)のクロス表

回心体験における確認 としての聖書の有無		洗礼の有無[人数(%)]		合計
		あり	なし	
クリスチャン 高次体験群	あり	48(100.00)	0(0.00)	48(100.00)
	なし	3(100.00)	0(0.00)	3(100.00)
クリスチャン 回心体験群	あり	45(95.74)	2(4.26)	47(100.00)
	なし	11(100.00)	0(0.00)	11(100.00)
合計		107(98.17)	2(1.83)	109(100.00)

Fisherの直接確率法による $p=.425(n.s.)$

リスの検定を行った (Table 8参照)。その結果, 4群間に有意差はみられなかった ($H(3, N=106)=3.89, n.s.$)。「信念」の差異によっては, 回心体験の有無および確認の聖書の有無の違いはみられないことが示された。

(6) 回心体験→回心体験における確認としての聖書(の言葉)[有無]

クリスチャン(高次体験群, 回心体験群)について, 回心体験と確認の聖書の有無との関連を検討するために, 2×2 のクロス表による χ^2 検定を行った (Table 9参照)。その結果, 5%水準で有意な関連が認められた ($\chi^2(1, N=109)=4.15, p<.05$)。残差分析の結果, 全ての群で有意な関連がみられ, 高次体験群では, 確認の聖書ありが有意に多く, 確認の聖書なしは有意に少なかった。回心体験群では, 確認の聖書ありが有意に少なく, 確認の聖書なしは有意に多かった。以上の結果は, 回心体験のみのクリスチャンよりも高次の回心体験をしたクリスチャンのほうが確認の聖書を多く有することが示された。

(7) 回心体験における確認としての聖書(の言葉)[有無]→洗礼を受ける[有無]

クリスチャン(高次体験群, 回心体験群)について,

確認の聖書の有無と洗礼の有無の関連を検討するために, 4×2 のクロス表によるFisherの直接確率法を行った (Table 10参照)。その結果, 有意な関連がみられなかった。したがって, 高次体験群, 回心体験群ともに確認の聖書の有無は, 洗礼の有無と関連がないことが示された。

(8) 「信念」→洗礼を受ける[有無]

(7)で有意な関連がみられなかったことから, クリスチャン(高次体験群, 回心体験群)および非クリスチャン群について, 洗礼の有無と「信念」との関連を検討するために, クラスカル・ウォリスの検定を行った (Table 11参照)¹⁰⁾。その結果, 5群間に有意差が認められた ($H(4, N=116)=12.53, p<.05$)。下位検定の結果, 高次体験[洗礼あり]群が, 非クリスチャン[洗礼なし]群よりも有意に高い得点を示した。洗礼を受けている高次体験のあるクリスチャンは, 洗礼を受けていない非クリスチャンよりも高い「信念」を有していることが示されたが, 高次の回心体験と回心体験との違いによる「信念」の違いはみられなかった。

Table 11 「信念」得点の平均値、中央値、標準偏差、人数、ノンパラメトリック検定分析結果

	クリスチャン			非クリスチャン	
	高次体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼なし]群	[洗礼あり]群	[洗礼なし]群
平均値	22.06	20.79	21.50	20.67	14.67
中央値	23.00	21.00	21.50	21.50	15.00
標準偏差	2.38	3.56	2.12	2.16	3.51
人数	49	56	2	6	3
平均ランク	67.46	55.21	54.00	42.83	8.00
H検定	H(4,N=116)=12.53*				
下位検定(U検定):ボン フェローニ修正済	z=-2.78: 高次体験[洗礼あり]群(平均ランク27.91) > 非クリスチャン[洗礼なし]群(平均ランク3.50)**				

*p<.05, **p<.01

Table 12 回心体験・高次の回心体験の有無(3)×洗礼の有無(2)のクロス表

回心体験・高次の回心体験の有無	洗礼の有無[人数(%)]		合計
	あり	なし	
クリスチャン高次体験群	51(100.00)	0(0.00)	51(100.00)
クリスチャン回心体験群	57(96.61)	2(3.39)	59(100.00)
非クリスチャン群	6(60.00)	4(40.00)	10(100.00)
合計	114(95.00)	6(5.00)	120(100.00)

Fisherの直接確率法による p<.01

Table 13 「効果報酬」得点の平均値、中央値、標準偏差、人数、ノンパラメトリック検定分析結果

	クリスチャン		
	高次体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼なし]群
平均値	27.98	25.35	25.50
中央値	29.00	26.00	25.50
標準偏差	2.31	3.85	4.95
人数	50	57	2
平均ランク	68.08	43.92	43.75
H検定	H(2,N=109)=16.17**		
下位検定(U検定):ボン フェローニ修正済	z=-3.99: 高次体験[洗礼あり]群(平均ランク66.63) > 回心体験[洗礼あり]群(平均ランク42.92)**		

**p<.01

(9) 回心体験 [有無] → 洗礼を受ける [有無]

(7)で有意な連関がみられなかったことから、回心体験の有無と洗礼の有無との連関を検討するために、3×2のクロス表によるFisherの直接確率法を行った (Table 12参照)。その結果、1%水準で有意な連関が認められた。したがって、回心体験の違いが、洗礼の有無に影響することが示された。

(10) 洗礼を受ける [有無] → 現実定義の内在化 (「効果報酬」)

クリスチャンについて、洗礼の有無と現実定義の内在化を示す「効果報酬」との関連を検討するために、クラスカル・ウォリスの検定を行った (Table 13参照)。その結果、3群間に有意差が認められた (H(2, N=109)=16.17, p<.01)。下位検定の結果、高次体験[洗礼あり]群が、回心体験[洗礼あり]群よりも有意に高い得点を示した。洗礼の有無では違いがみられなかったが、洗礼を受けている高次体験のあるクリスチャンは、

洗礼を受けている回心体験のあるクリスチャンよりも高い「効果報酬」を有していることが示された。

(11) 洗礼を受ける [有無] → 現実定義の内在化 (「効果責任」)

クリスチャンについて、洗礼の有無と現実定義の内在化を示す「効果責任」との関連を検討するために、クラスカル・ウォリスの検定を行った (Table 14参照)。その結果、3群間に有意差が認められた (H(2, N=105)=8.41, p<.05)。しかし下位検定を行った結果では、各条件間には有意差はみられなかった。

(12) 現実定義の内在化 (「効果報酬」・「効果責任」) → (高次の回心体験前の)「気づき体験」

クリスチャン群 (高次体験群, 回心体験群) における現実定義の内在化を示す「効果報酬」・「効果責任」と (高次の回心体験前の)「気づき体験」がどのように関連しているかを検討するために、「体験」を目的変数、「効果

Table 14 「効果責任」得点の平均値, 中央値, 標準偏差, 人数, ノンパラメトリック検定分析結果

	クリスチャン		
	高次体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼あり]群	回心体験 [洗礼なし]群
平均値	24.26	22.48	17.50
中央値	26.00	24.00	17.50
標準偏差	7.09	5.70	2.12
人数	47	56	2
平均ランク	61.23	47.43	15.50
H検定	H(2,N=105)=8.41*		

* $p < .05$

Table 15 高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）の検討

高次の回心体験有	高次の回心体験における確認としての の聖書の有無[人数(%)]		合計
	あり	なし	
クリスチャン高次体験群	41(82.00)	9(18.00)	50(100.00)
合計	41(82.00)	9(18.00)	50(100.00)

$$\chi^2(1, N=50)=20.48, p < .01$$

報酬」・「効果責任」を説明変数として重回帰分析を行った。決定係数は、高次体験群、回心体験群ともに有意な値を示した（高次体験群： $R^2 = .570 (p < .01)$ 、「効果報酬」 $\beta = .762 (p < .01)$ 、「効果責任」 $\beta = -.036 (n.s.)$ 、 $N = 42$ ；回心体験群： $R^2 = .641 (p < .01)$ 、「効果報酬」 $\beta = .807 (p < .01)$ 、「効果責任」 $\beta = -.031 (n.s.)$ 、 $N = 55$ ）。標準偏回帰係数の値をみると、高次体験群、回心体験群ともに「効果報酬」が正の影響を与えていることが示された。しかし、「効果責任」は有意な影響を与えないことが示された。

(13) (高次の回心体験前の)「気づき体験」→「信念」

クリスチャン群（高次体験群、回心体験群）における（高次の回心体験前の）「気づき体験」と「信念」がどのように関連しているかを検討するために、「信念」を目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、高次体験群、回心体験群ともに有意な値を示した（高次体験群： $r^2 = .526 (p < .01)$ 、 $b = .726 (p < .01)$ 、 $N = 44$ ；回心体験群： $r^2 = .469 (p < .01)$ 、 $b = .685 (p < .01)$ 、 $N = 55$ ）。回帰係数の値をみると、高次体験群、回心体験群ともに「気づき体験」が「信念」に正の影響を与えていることが示された。

(14) (高次の回心体験前の)「気づき体験」→高次の回心体験（きよめの体験）[有無]

クリスチャンについて、（高次の回心体験前の）「気づき体験」と高次の回心体験の有無（高次体験群、回心体験群）との関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、1%水準で有意差が認められた（ $t(96.50) = 4.87, p < .01$ ；高次体験群： $M = 46.24, SD = 5.75, N = 46$ ；回心体験群： $M = 39.05, SD = 8.55, N = 56$ ）。高次体験のあるクリスチャンは、回心体験のみのクリスチャンよりも高い「気づき体験」を有していることが示

された。

(15) 信念→高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）[有無]

高次体験群について、「信念」と高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）の有無との関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、1%水準で有意差が認められた（ $t(45.95) = -4.31, p < .01$ ；高次体験[確認あり]群： $M = 21.67, SD = 2.51, N = 39$ ；高次体験[確認なし]群： $M = 23.56, SD = 0.53, N = 9$ ）。高次体験の確認の聖書を有する高次体験群は、高次体験の確認の聖書を有さない高次体験群よりも低い「信念」を有することが示された。

(16) 高次の回心体験→高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）[有無]

高次体験群について、高次体験の確認の聖書の有無を検討するために、 χ^2 検定を行った（Table 15参照）。1%水準で有意な連関が認められた（ $\chi^2(1, N = 50) = 20.48, p < .01$ ）。したがって、高次体験群では、高次体験の確認の聖書を有する場合は有意に多いことが示された。

(17) 高次の回心体験における確認としての聖書（の言葉）[有無] →（高次の回心体験後の）「気づき体験」

高次体験群について、高次体験の確認の聖書の有無と（高次の回心体験後の）「気づき体験」の関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、有意差がみられなかった（ $t(44) = -1.39, n.s.$ ；高次体験[確認あり]群： $M = 45.74, SD = 5.97, N = 39$ ；高次体験[確認なし]群： $M = 49.00, SD = 3.46, N = 7$ ）。高次体験の確認の聖書の有無によって「気づき体験」に有意な差異はみられなかった。

(18) 信念→(高次の回心体験後の)「気づき体験」

(17)で有意差がみられなかったことから、高次体験群について、「信念」と(高次の回心体験後の)「気づき体験」がどのように関連しているかを検討するために、「体験」を目的変数、「信念」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、有意な値を示した(高次体験群： $r^2=.526(p<.01)$ ， $b=.726(p<.01)$ ， $N=44$)。回帰係数の値をみると、高次体験群では「信念」が「気づき体験」に正の影響を与えていることが示された。

(19) 高次の回心体験(きよめの体験)[有無]→(高次の回心体験後の)「気づき体験」

(17)で有意差がみられなかったことから、クリスチャン群について、高次の回心体験の有無(高次体験群、回心体験群)と「気づき体験」との関連を検討するために、 t 検定を行った。その結果、1%水準で有意差が認められた($t(96.50)=4.87$ ， $p<.01$ ：高次体験群： $M=46.24$ ， $SD=5.75$ ， $N=46$ ；回心体験群： $M=39.05$ ， $SD=8.55$ ， $N=56$)。高次体験のあるクリスチャンは、回心体験のみのクリスチャンよりも高い「気づき体験」を有していることが示された。

(20) (高次の回心体験後の)「気づき体験」→深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]

(高次の回心体験後の)「気づき体験」と高次体験群における「深いキリスト教理解」を示す[[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]がどのように関連しているかを検討するために、「信念」・[効果報酬]・[効果責任]をそれぞれ目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、「信念」，「効果報酬」では有意な値を示し(「信念」 $r^2=.526(p<.01)$ ， $b=.726(p<.01)$ ， $N=44$ ；「効果報酬」： $r^2=.561(p<.01)$ ， $b=.749(p<.01)$ ， $N=45$)、「効果責任」では有意な値を示さなかった(「効果責任」 $r^2=.021(n.s.)$ ， $N=43$)。回帰係数の値をみると、「信念」，「効果報酬」に対して正の影響を示している。神の存在や神の愛を感じることで、神やキリスト教を信じることで、神からの恩恵や安心を感じることに思いを高め、それらのことがキリスト教への深い理解につながっていくと思われる。

(21) 深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]→自我の中心領域への定着 [[共同体]]¹²⁾

高次体験群における「深いキリスト教理解」を示す[[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]と「自我の中心領域への定着 [[共同体]]」がどのように関連しているかを検討するために、「共同体」を目的変数、「信念」・[効果報酬]・[効果責任]を説明変数として重回帰分析を行った。決定係数は、有意な値を示した($R^2=.183(p<.05)$)、「信念」： $\beta=.090(n.s.)$ ；「効果報酬」： $\beta=.315(n.s.)$ ；「効果責任」： $\beta=.113(n.s.)$ ， $N=45$)。決定係数は有意であったが、標準偏回帰係数は有意な値を示さなかった

(22) 深いキリスト教理解 [[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]→現実定義を代表し、表現する存在 [[行動]]¹²⁾

高次体験群における「深いキリスト教理解」を示す[[信念]・[効果報酬]・[効果責任]]と「現実定義を代表し、表現する存在となる [[行動]]」がどのように関連しているかを検討するために、「行動」を目的変数、「信念」・[効果報酬]・[効果責任]を説明変数として重回帰分析を行った。決定係数は、有意な値を示した($R^2=.378(p<.01)$)、「信念」： $\beta=-.134(n.s.)$ ；「効果報酬」： $\beta=.571(p<.01)$ ；「効果責任」： $\beta=.269(n.s.)$ ， $N=43$)。標準偏回帰係数の値をみると「効果報酬」では有意な中程度の正の影響を示した。神からの恩恵や安心を感じることで、積極的な宗教行動を取らせ、キリスト教を代表し、表現する存在となっていくことが窺われる。

(23) 自我の中心領域への定着 [[共同体]，[信念]]・現実定義を代表し、表現する存在 [[行動]，[効果責任]]→「気づき体験」

高次体験群における「自我の中心領域への定着 [[共同体]，[信念]]」および「現実定義を代表し、表現する存在となる [[行動]，[効果責任]]」と「気づき体験」がどのように関連しているかを検討するために、「体験」を目的変数、「共同体」・[信念]・[行動]・[効果責任]を説明変数として重回帰分析を行った。決定係数は、有意な値を示した($R^2=.501(p<.01)$)、「共同体」： $\beta=.099(n.s.)$ ；「信念」： $\beta=.571(p<.01)$ ；「行動」： $\beta=.172(n.s.)$ ；「効果責任」： $\beta=-.002(n.s.)$ ， $N=40$)。標準偏回帰係数の値をみると、「信念」が「気づき体験」へ有意な中程度の正の影響を与えていることが示された。

(24) 「気づき体験」→「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践 [[信念]・[効果報酬]・[行動]]

「気づき体験」と「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践 [[信念]・[効果報酬]・[行動]]がどのように関連しているかを検討するために、「信念」，「効果報酬」，「行動」をそれぞれ目的変数、「体験」を説明変数として単回帰分析を行った。決定係数は、有意な値を示した(「信念」： $r^2=.526(p<.01)$ ， $b=.726(p<.01)$ ， $N=44$ ；「効果報酬」： $r^2=.561(p<.01)$ ， $b=.749(p<.01)$ ， $N=45$ ；「行動」： $r^2=.168(p<.01)$ ， $b=.410(p<.01)$ ， $N=44$)。回帰係数の値をみると、「信念」，「効果報酬」に対して有意な強い正の影響を示し、「行動」に対しては有意な中程度の正の影響を示した。神の存在や神の愛を感じることで、「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践へと結びついていくことが示された。

考 察

本研究では、ホーリネス系教会に関わる日本人成人の「宗教性」発達モデルを検討した。「宗教性」発達モデルにおける各局面ごとの関連・差異を検討することによって、成人期の「宗教性」発達について以下のような点が示唆された。

まずモデル全体を通して、概ね「宗教性」尺度の得点の高い＝キリスト教に傾倒しているクリスチャンほど「宗教性」発達モデルに適ったプロセスを経ることが示唆された。このことにより、キリスト教への関与の高さが、「宗教性」発達に関わる重要な要因であることが確かめられたことになる。ただし、この「宗教性」発達モデルは、Glock (1962), Verbit (1970) の「宗教性」および作道 (1983, 1984a, 1984b, 1986) の宗教的社会的観点から構成したものであり、本研究におけるモデルの検討も、それらの観点から分析を行い、その範囲内で明らかにされたものである。

続いて、「宗教性」発達モデルについて特徴的な局面について考察する。

現実定義との接触から回心体験における契機としての聖書（の言葉）への局面では、回心体験の違いによって異なる様相を示した。すなわち、高次の回心体験をしたクリスチャンでは、「共同体」、「知識」、「行動」の全てが高いほど契機の聖書を有する傾向にあった（第1判別関数）。しかし、「知識」、「行動」が高い高次の回心体験をしたクリスチャンおよび回心体験のみのクリスチャンでは、契機の聖書を有さない傾向にあり、「共同体」が高い回心体験のみのクリスチャンでは、契機の聖書を有する傾向にあった（第2判別関数）。このような結果は、「宗教性」発達モデルの構成（松島, 2007; 松島・宮下, 2008）の際には捉えることができなかった傾向である。本研究のモデルの検討を通して、この局面間に関する新たな傾向を示すことができたと思われる。

回心体験における契機としての聖書（の言葉）→（回心体験前の）「気づき体験」→回心体験（救いの体験）への局面では、高次の回心体験をし、かつ契機の聖書を有するクリスチャンがもっとも高い「気づき体験」を有することが示された。「宗教性」発達モデルの構成では、「宗教性」発達のプロセスを経ていくなかで「気づき体験」が深まっていき、一層、神を感じたり、さらに神を求めようとするようになることが示されている（松島, 2007; 松島・宮下, 2008）。これらの局面の結果から、「宗教性」発達モデルに適ったプロセスを経ているクリスチャンは、「気づき体験」がより深まっていると示唆されたといえる。

回心体験・「信念」→回心体験における確証としての聖書（の言葉）→洗礼を受けるへの局面については、高次体験群と回心体験群とはほとんど違いはみられないとの結果となった。これら一連の局面は、クリスチャンではなかった者がクリスチャンとなり、さらに教会の構成員となっていくプロセスを示したものである。すなわち、このプロセスは「自分がクリスチャンであること」を自覚するプロセスである。高次体験群も回心体験群も共にクリスチャンであり、「自分がクリスチャンであること」を自覚すること自体に回心体験の違いは存在しないであろう。そのことが今回の結果につながったのではないかとと思われる。

しかし、回心体験から回心体験における確証としての聖書（の言葉）への局面については、回心体験のみのクリスチャンよりも高次の回心体験をしたクリスチャンのほうが確証の聖書を多く有するとの結果となった。この

結果については次のように考えられないだろうか。回心体験は、第1の転機としての「回心体験」があり、さらに第2の転機として、「高次の回心体験」がある。高次の回心体験へ進むプロセスでは、第1の転機としての回心体験を経験したとの確信がなければ高次の回心体験へ進むことは難しいであろう。ホーリネス系教会のクリスチャンにとって、その体験が確かなものとなるために据えられているのが聖書の言葉なのである（日本ホーリネス教団教育局, 2000）。聖書の言葉によって自らの体験が確かなものとなり、さらにクリスチャンとしての次の一歩へ進んでいく。高次の回心を体験したクリスチャンは、この局面で体験の確証となる聖書の言葉を有したからこそ、より確かな形で第2の転機となる高次の回心体験へと進んでいったと考えられるのである。

現実定義の内在化に関する局面では、洗礼の有無によって違いはみられず、回心体験の違いによって効果の現れ方に違いがみられた。「効果報酬」では、高次体験〔洗礼あり〕群が、回心体験〔洗礼あり〕群よりも有意に高い得点を示した。また、「効果責任」については、下位検定で群間における有意な差異はみられなかったが、尺度得点をみると、高次体験〔洗礼あり〕群が他の群よりも高い得点を示していた。すなわち、成人の高次体験のあるクリスチャンは、洗礼を受けた後、クリスチャンとしての心の平安や幸福感、クリスチャンとしての責任、責務がともに高まる（現実定義が内在化されていく）ことが示唆された。モデル構成では、回心体験の違いについては明らかにすることができなかったが、モデルの検討によって、この局面における新たな傾向を示すことができたと思われる。

現実定義の内在化（「効果報酬」、「効果責任」）から（高次の回心体験前の）「気づき体験」への局面では、高次体験群、回心体験群共に「効果報酬」のみ正の影響を与えていた。これは、高次の回心体験に向けて、教会への義務感よりも、神からの恩恵によって神の存在や神の愛を深く感じるようになっていくことを示唆するものではないか。この結果は、モデル構成（松島, 2007; 松島・宮下, 2008）とは異なる興味深い結果であり、さらに検討する必要があるように思える。

（高次の回心体験前の）「気づき体験」から「信念」への局面では、現実定義の内在化から「気づき体験」と同様に高次体験群、回心体験群共に有意な結果となり、正の影響を与えていることが示唆された。現実定義の内在化→「気づき体験」→「信念」をみると、高次体験群と回心体験群はほぼ同様な結果になっている。この結果をみると、回心体験群も高次の回心を体験するに至るのではないかと考えてしまう。しかし、その違いは、

（高次の回心体験前の）「気づき体験」から高次の回心体験（きよめの体験）への局面の結果が示唆を与えている。すなわち、この局面において、高次の回心体験のあるクリスチャンは、回心体験のみのクリスチャンよりも高い「気づき体験」を有していることが示唆された。この示唆は、神を求め、神の愛を深く感じる姿勢が高まっていくことにより、高次の回心体験へとつながっていくことを示したものといえる。日本ホーリネス教団教育局（2000）も、高次の回心体験、回心体験共に、自らがそ

の体験を求めることの重要性を指摘している。今回の結果は、この指摘を支持する結果となったのではないだろうか。

さらに、「高次の回心体験」以降も、各局面ごとの「宗教性」の下位概念間に有意な関連がみられた。しかし、筆者が、成人と共に青年期後期にあたる18～25歳のホーリネス系教会に関わる日本人青年（以下、青年と記す）の「宗教性」発達モデルを検討した際には、「高次の回心体験」以降では、各局面ごとの関連はほとんどみられないとの結果となった（松島，2007）。なぜこのような違いがみられたのだろうか。「高次の回心体験」以降のプロセスについては、青年と比較しながら考察したい。

成人の高次の回心体験をした平均年齢は、28.9歳（ $SD = 11.1$ 歳：範囲14～61歳）であった。また、青年の高次の回心体験をした平均年齢は、19.4歳（ $SD = 3.1$ 歳：範囲14～24歳）であった。成人、青年ともに高次の回心を体験した年齢の始まりが14歳であり、この結果は他の回心研究で示されている研究とほぼ同じである。しかし、平均年齢を比較すると、成人のほうが青年よりも10歳近く平均年齢が高い結果となった。この結果は、青年の対象年齢が18～25歳であるのに対し、成人の対象年齢が26～64歳であることも影響しているだろう。しかしこの結果から、高次の回心体験は、青年期以降にも多く生じることが示唆されているのではないだろうか。実際、成人で高次の回心体験をしている者のうち50%の人が成人期（26歳）以降に高次の回心体験をしたと回答している。

青年では、高次の回心体験後間もないクリスチャンが多くを占めていたことから、高次の回心体験以降では、各局面ごとの関連がほとんどみられなかったと考察した（松島，2007）。その考察を踏まえて、成人について、調査時の年齢から高次の回心を体験した年齢を引き、「高次の回心を体験してからどの程度の期間が経っているのか」について平均値を算出したところ、17.5年（ $SD = 9.8$ 年：範囲3～40年）との結果が示された。期間の範囲をみても、短い者でも3年、長い者では40年を経ている。青年とは異なり、成人では高次の回心を体験してからある程度の年月が経っていることがわかる。高次の回心体験以降の各局面ごとの関連は、高次の回心体験後の時間の経過とともに形成されていくものと推察される。

以上のことから、成人における「高次の回心体験」以降の「宗教性」発達は、時間の経過とともに、「深いキリスト教理解」～「自我の中心領域への定着」および「現実定義を代表し、表現する存在」～「宗教性」の深まりと「宗教性」に基づく態度・実践へと進んでいく（各局面ごとに関連がみられる）ことが示唆されたといえる。高次の回心体験以降間もない時期では各局面ごとの関連はみられないと示唆された青年の結果と合わせ、成人における「宗教性」発達モデルの検討では、構成した「宗教性」発達モデル（松島，2007；松島・宮下，2008）の妥当性（プロセスの妥当性）を示すことができたと思われる。

しかし、次の結果については今後の課題としたい。高次体験群について、「信念」と高次の回心体験における確証としての聖書（の言葉）の有無との関連を検討した

結果、高次体験の確証の聖書を有さないクリスチャンは、高次体験の確証の聖書を有するクリスチャンよりも有意に高い「信念」を有することが示された。先述した通り、ホーリネス系教会では、自分自身の回心体験を確かなものとするために、回心を体験した根拠となる聖書の言葉を重視する傾向がある（日本ホーリネス教団教育局，2000）。そのような傾向から、構成した「宗教性」発達モデル（松島，2007；松島・宮下，2008）では、「信念」と高次体験の確証の聖書とは密接につながっているとの局面が示された。しかし、モデルの検討で示された結果については、ホーリネス系教会の教義から検討してみても、教義にそぐわない結果となっていることからその原因を明確に示すことができない。また、「宗教性」発達モデルの構成（松島，2007；松島・宮下，2008）およびこの局面における対象人数がともに多いとはいえないため、この点からも明確に示すことができないと思われる。そのため、この局面で示された結果については、今後の検討課題としたい。

引用文献

- Cornwall, M., Albrecht, S.L., Cunningham, P.H., & Pitcher, B.L. (1986). The dimensions of religiosity: A conceptual model with an empirical test. *Review of Religious Research*, 27, 226-244.
- Glock, C.Y. (1962). On the study of religious commitment. *Religious Education Research Supplement*, 57, 98-110.
- 今田恵. (1955). 宗教意識の発達. 牛島義友・桂広介・依田新 (編), *青年心理学講座: 1巻 文化と人生観* (pp. 99-145). 東京: 金子書房
- 神保信一. (1980). 宗教性の発達. 澤田慶輔・神保信一 (編), *サイエンスライブラリ心理学: 3 青年心理学* (pp. 94-105). 東京: サイエンス社
- 小林和夫. (2004). 論集『聖化論の研究』: ウェスレアン・アルミニアニズムの立場より. 東京: 日本ホーリネス教団
- 松島公望. (2005). 日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発: プロテスタント教会一教派 (ホーリネス系教会) を対象にして. *学校教育学研究論集第11号*, 東京学芸大学, 東京, 13-28
- 松島公望 (2006). キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連: キリスト教主義学校生徒を中心にして. *発達心理学研究*, 17, 282-292
- 松島公望 (2007). プロテスタント・キリスト教に関わる日本人の宗教性発達に関する心理学的研究—ホーリネス系教会およびキリスト教主義学校を対象にして—. 東京学芸大学博士論文
- 松島公望・宮下一博 (2008). ホーリネス系教会に関わる日本人クリスチャンの「キリスト教における宗教性」発達モデルの構成. *千葉大学教育学部研究紀要*, 56, 31-45
- 日本ホーリネス教団教育局 (編). (2000). *教会員手帳*. 東京: 日本ホーリネス教団
- 西脇良. (2005). 宗教性発達研究の研究動向. 浦上昌

- 則・神谷俊次・中村和彦 (編), *心理学: Introduction to Psychology* (pp. 122-123). 京都: ナカニシヤ出版
- 作道信介. (1983). 入信過程に影響を及ぼす心理学的諸要因の検討. *日本心理学会第47回大会発表論文集*, 782
- 作道信介. (1984a). 入信以後の宗教的社会化の過程: M県S教会の専従者の場合. *日本心理学会第48回大会発表論文集*, 677
- 作道信介. (1984b). 宗教集団の発展段階と入信過程: 宮城県S教会を対象として. *日本文化研究所研究報告別巻第21集*, 東北大学, 宮城, 31-59
- 作道信介. (1986). 羊と羊飼: S教会におけるアイデンティティの確立. *日本文化研究所研究報告別巻第23集*, 東北大学, 宮城, 1-36
- 杉山幸子. (2004). *新宗教とアンデンティティ: 回心と癒しの宗教社会心理学*. 東京: 新曜社
- Verbit, M.F. (1970). The components and dimensions of religious behavior: Toward a reconceptualization of religiosity. In P.E. Hammomd, & B. Johnson (Eds.), *American mosaic* (pp. 24-39). New York: Random House.

脚 注

- 1) 「体験」の概念には、「回心体験」および「神や日常生活のなかで、神、神の愛、また、神に関連する事柄をどのように考え、感じているかの体験」の両方の意味が含まれていることから、「回心体験」との相違を明確にするために、後者の「体験」を「気づき体験」とした (松島, 2007)。
- 2) 作道 (1983, 1984a, 1984b, 1986) は, Berger & Luckmann (1967) の所説に基づき, 宗教的社会化を宗教集団における再社会化過程と位置づけ, 回心体験を単に宗教体験を指すものとするのではなく, 宗教集団における社会化の問題として捉えることとした。宗教的社会化の定義は『個人が宗教集団において共有されている現実定義を内在化し, その定義を自我の中心領域に定着させ, それを代表し表現する存在となる過程』である。この定義のなかで, 現実定義とは『宗教集団において各構成員に共有されている宗教集団のなかでの現実 (人間の罪の問題など) への見方』を表している。
- 3) 救いの体験とは, キリスト教において, 自らの罪を悔い改め, イエス・キリストを救い主として信じ, 自分の罪が赦されることをいう。本研究は, 心理学的研究であるため, 教会用語である救いの体験という用語は原則としては使わずに, 「救いの体験」を「回心体験」と呼ぶことにする。
- 4) きよめ (聖化; Sanctification) の体験とは, 「神より救いを受けた者でも, 人間のなかに深く食い込んでいる罪の性質 (これを原罪という) までは, 救いの体験ではまだ処置されていない」とのホーリネス系教会の教えに基づき, 神の恵みが, 原罪の性質にまでおよび, 故意に罪を犯すことがなくなり, 自己中心的な生き方から神中心の生き方へと変化する体験をいう。このことによってクリスチャンとしての本格的な成長がなされるとの見解をホーリネス系教会はとっている。そのため, きよめの体験は重視されており, きよめの体験を得るための集会 (聖会) なども催されている。本研究は, 心理学的研究であるため, 教会用語であるきよめの体験という用語は原則としては使わずに, 「きよめの体験」を「高次の回心体験」と呼ぶことにする。
- 5) 「効果」は, 宗教意識と宗教行動の両側面を含む構成概念だが, 回答者の認知的, 感情的側面を測定することを目的とするために, 宗教意識尺度に含めることとする。
- 6) 「知識」は, 構成概念としては宗教意識に含まれるが, 設問は知識の有無を調べるテスト形式をとらざるを得ず, 評定法を使用する宗教意識尺度 (単一尺度) として扱うことができない。したがって, 宗教意識尺度とは別に宗教知識テストを作成することとする。
- 7) 効果責任の選択肢については, 「まったく義務がない, あまり義務がない, 少し義務がある, 中程度に義務がある, 強い義務がある, 非常に強い義務がある」とした。
- 8) 宗教知識テストについては, できる限り幅広い範囲から出題するように作成されたため項目内容や回答方法の違いがある。この作成の経緯から他の尺度とは異なり a 係数において高い数値を示さなかったと思われる。
- 9) たとえば, 礼拝出席, キリスト教の集会では, 「ほぼ毎週出席した, 月に 2, 3 回出席した, 月に 1 回くらい出席した, 数ヶ月に 1 回くらい出席した, 1 年に 1, 2 回くらい出席した, まったく出席しなかった」とした。また, 聖書通読では, 「毎日, 3 回以上読んだ, 毎日, 2 回くらい読んだ, 毎日, 1 回は読んだ, 1 週間に数回は読んだ, たまにしか読まなかった, まったく読まなかった」とした。
- 10) 高次体験群では, 洗礼を受けていない者は 1 人もいなかった。
- 11) 「深いキリスト教理解」および「自我の中心領域への定着」では, とともに「信念」が含まれている。同じ変数の関連を分析することはできない。モデルの順序に沿って分析を行っていくため, 目的変数の「信念」は扱わないこととする。
- 12) 「深いキリスト教理解」および「現実定義を代表し, 表現する存在となる」では, とともに「効果責任」が含まれている。同じ変数の関連を分析することはできない。モデルの順序に沿って分析を行っていくため, 目的変数の「効果責任」は扱わないこととする。